

本店レク 議事メモ

日時：平成23年4月26日（火）10:40～11:50

場所：東京電力本館1階101AB会議室

先方：記者約50名（カメラ5台）

当方：原子力・立地本部

原子力設備管理部

広報部

配付資料：

- ・ 東北地方太平洋沖地震による影響などについて（4月26日午前9時現在）
- ・ 集中廃棄物処理施設周辺 サブドレン水核種分析結果（4/25現在）
- ・ 福島第一原子力発電所モニタリングカーによる計測状況
- ・ 福島第二原子力発電所モニタリングによる計測状況
- ・ 福島第一原子力発電所仮設モニタリングポストによる定点計測状況
- ・ 福島第一原子力発電所モニタリングポスト空間線量率
- ・ 当社福島第一原子力発電所の事故に係わる運転記録及び原子炉施設等の事故記録に関する報告の収集について
- ・ 福島第一原子力発電所プラント関連パラメータ（水位・圧力・温度などのデータ）
- ・ 1／2号と5／6号に関する外部電源所内連系概略図
- ・ 福島第一原子力発電所内電源強化
- ・ 飛散防止剤の散布計画図（参考配付資料）
- ・ 廻屋周り施工イメージ（参考配付資料）
- ・ 飛散防止剤散布実績一覧表（参考配付資料）

質疑：

Q. 1号機のロボットによる作業の詳細は。

A. 原子炉に $6\text{ m}^3/\text{h}$ で注水しており、炉心頂部まで冠水する予定だが、その前に現場の状況として漏洩等がないかどうかを本日10:30より約3時間、バックポートを入れて詳細確認を実施する予定。

Q. 全ての場所を確認することは可能か。

A. R/B 1Fの北側エリアを中心に確認が可能。

Q. 2号機のトレーニングの移送について、水位が下がらない理由は。

A. 原子炉建屋側からの流入がある可能性があるが、現状原因は不明。移送をしている水が漏れていることはないと判断している。また地下水が建屋側に入ってきた可能性もある。

Q. 4号機の溜まり水の水量は。

A. 確認する。

Q. 1号機の注水量は $14\text{ m}^3/\text{h}$ にするのか。

A. 段階的に $14\text{ m}^3/\text{h}$ に上げていく。 $6 \rightarrow 10 \rightarrow 14 \rightarrow 6\text{ m}^3/\text{h}$ と変えていく。本日の結果を見て明日から実施する予定。

Q. 1F建屋の北側には何があるのか。

A. 制御棒駆動機構がある。

Q. 1号格納容器内の水量は。

A. 圧力容器底部に到達したことを示すようなパラメータの変化はない。赤道から圧力容器底部の高さにあると推定。

Q. 1号機への注水の段階的な水量増加は、何時間おきに実施するのか。

A. 計画中の段階。確定したらお知らせする。

Q. ロボットでの確認内容の詳細は。

A. R/B 1F北側エリアを中心に、漏洩の有無を確認する。

Q. 3号のトレンチ水位の上昇についての見解、対処方法は。

A. 原子炉建屋の漏水や、地下水からの流入等が考えられるが、原因は今のところ不明。3号T/B建屋内にひとまず溜め、2号T/Bのたまり水を優先的に処理していく。

Q. フラッティングとは。

A. 原子炉容器、格納容器の水位を上げて燃料の頂部まで水に浸すこと。

Q. 4号機のT/Bの溜まり水の処理方法は。

A. 3月下旬に4号T/Bの溜まり水の分析を行った後、水位の変化が見られたことから溜まり水の核種の分析をしたもの(ヨウ素10倍、セシウム100倍)。3号機からの流入により濃度が上昇している可能性あるが、現状不明。但し、サブドレン水の確認から建屋の外に漏れていることはないと考える。なお、高濃度の処理はゼオライトの水処理により低濃度にすることを計画中。

Q. ロボットでの確認結果により、明日の炉注テストを中止と判断するのはどのような状況の時か。

A. 格納容器側からの漏水が確認できた場合は計画を見直すこともある。

Q. 「当社福島第一原子力発電所の事故に係わる運転記録及び原子炉施設等の事故記録に関する報告の収集について」の詳細について。

A. 昨日、保安院から指示文書を受領した。これまで報告を実施していた原子力パラメータに加え、事故記録等も含めた形での報告を求められた。中央制御室のデータを回収で



き次第、報告していく予定。

Q. 1Fの作業人数は。

A. 1日合計、1,000~1,200人。

Q. 1号機の水位をこのタイミングで上げる理由は。

A. 特に明日開始しないといけないという訳ではない。窒素注入がしっかりとできていることから、実施可能と考えたもの。

Q. 水位上昇時にどのパラメータを確認するのか。また現場に監視カメラを採用するのか。

A. 段階的な確認しかできない。格納容器、原子炉内の温度、圧力などその他パラメータを確認することや、作業完了後、ロボットを使い現地確認することも計画中。

Q. 本格的に炉注量を上げるタイミングは。

A. 明日の試験結果を踏まえて判断する予定。

Q. 昨日の合同記者会見の感想は。

A. 4者合同で会見を実施したことにより統一した説明ができたと考えている。今後も情報公開の透明性に努めてまいりたい。

Q. ベントが遅れた理由について、細野氏は東京電力の社風もあるのではないかとの見解を示しているようだが。

A. そのような感想を細野氏に持たれているということを踏まえ、1つ1つ適切に対応してまいりたい。

Q. 「当社福島第一原子力発電所の事故に係わる運転記録及び原子炉施設等の事故記録に関する報告の徹収について」をこのタイミングで実施する理由は。また中央制御室にデータを取りに行くことは可能ということか。

A. 保安院の見解は当社では不明。このような事例の打ち合わせがあったわけではない。データについても現状不明。

Q. 電源強化の内容について。

A. 水処理設備設置の電源への対応、雷時の自動開閉などにより遮断時間を抑えることを目的に実施。

Q. 炉水量を増加し、水位上昇時の安全性の検討は誰が実施しているのか。

A. 検討は東電にて行い、保安院が確認を行う。

Q. 1号の注水量を増やすとT/Bへの流入量が増えるなど、不足の事態は想定しているのか。

A. 指摘のとおり漏水が増えることもあり得る。リスクを減らす意味で段階的に水を注入することを計画している。 $14\text{m}^3/\text{h}$ で確認できれば、 $6\text{m}^3/\text{h}$ に戻す。その他の安全対策については別途、作業説明時に紹介予定。

Q. T/Bの水位の上昇に比べてトレーニングの水位の変化は遅れて出ることから、1号の炉注量の変化の影響は遅れて出てくる可能性もあるのか。

A. 一般的にはT/Bとトレーニングの水位の変化にはタイムラグがあるが、1号のT/BとトレーニングはつながっていないことからT/Bの水位が監視対象と考えている。

Q. 段階的に水を注入することだが、本格的に水管を始めたということか。

A. 試験的に実施するイメージ。明後日以降、試験的に実施した内容を評価の上で流量増の判断をする。

Q. 合同記者会見を見た感じでは、保安院の当時者意識が薄い。東電側の人数を増やすことは可能か。

A. 東電はプラント状況、作業状況を説明し、保安院はその内容を安全面から見解を述べていただくもの。今まで通り情報量としては提供できていると考えている。

Q. 窒素封入と水槽作業の関連性は。

A. 窒素封入は、格納容器が冷える段階で中の水素と酸素の分圧が上がることを防止するために実施している。今回、原子炉に注水しているので、格納容器の気層部が減るため、水素爆発するリスクを減らすために実施している。

Q. 現在の窒素濃度は低減されたという理解でよいのか。現状の水素、酸素の濃度を数字で示せないのか。

A. 水素、酸素の濃度については改めてお知らせさせていただく。1号の窒素注入を始めた時にも直ちに爆発するという状態ではなかった。ただし、今後格納容器が冷えていくことを考えると水蒸気を追い出して窒素を注入した方がいいだろうということで窒素注入を始めた。2・3号においても同じような状況だと思うが、格納容器の気密性の問題から窒素の封入が良いのか検討している段階。

Q. 4号機の汚染水の濃度が上がっているが、原因と対処方は。

A. 4号機の溜まり水は当初ほぼ海水であったが、3号機の廻り水の影響で濃度が上がっている。処理に関してはアレバ社の装置や高濃度仮設タンクを準備している。水処理の計画については近々お示ししたい。

Q. 飛散防止剤の散布はいつのタイミングか。

A. 試験散布の結果、効果があることを確認できた。これまで実施してきた有人散布に加え、クローラダンプを用いて無人散布も行っていく予定。クローラダンプを用いた散布は明日からかと思う。

Q. 建屋周辺だけ無人クローラダンプを使用するのか。

A. 平地でも無人クローラダンプは使用可能である。

Q. 今後、タービン建屋の核種分析の試験頻度を増やす予定はないのか。

A. 現時点では次回実施の予定は確定していないが、建屋の状況を見ながら実施してまいりたい。

Q. 人手が足りないのであれば、サンプリングを外部機関に依頼しないのか。

A. 人手が足りないのでなく、今回は兆候があつたためサンプリングを実施したもの。

Q. 飛散防止剤を散布すると土壤分析が出来ないのではないか。

A. 土壤分析は飛散防止剤ごと掘り出して分析することが可能である。試験散布効果の確認については別途確認させていただきたい。

Q. 1号機の冠水を決めたのは水素爆発の危険性がなくなったからなのか。

A. これまで発熱に見合った水量を注水してきたが、最終的な目標は原子炉内の冷却であり、原子炉内を水で満たすことを考えている。

Q. 2, 3号機の窒素注入の予定は。

A. 2, 3号機の窒素注入については検討を進めているところであり、今月内にできるかどうか未定。5月にずれ込む可能性もある。

Q. 2, 3号機で窒素を入れられない理由は何か。

A. 入れることによって安全性にどのような影響があるか確認する必要がある。2, 3号機はPCVの過密性が十分ではないと見られることから、格納容器内の放射性物質を押し出してしまうことなどが考えられることから、安全性についてよく検討しているところ。

Q. 飛散防止剤の散布について。これまでの試験結果の評価は。

A. 試験散布の評価については、確認項目として、“むらなく撒けるか” “固化できるか” “線量の変化”について整理をして本格散布に移行できる感触は持っているが、その評価については改めてご説明させていただきたい。本格散布時の総面積は50万平方。

Q. 6m³から14m³に注水量を上げる根拠は何か。ポンプの性能により限界があるのか、今後さらに上げていく可能性があるのか。

A. 注入量については、今回のテストを踏まえて決めていきたい。

Q. 報告収の対象は何か。また、このうち中操室に紙で残っているものは何か。

A. 確認する。

Q. 飛散防止剤の散布の件。地図の白いところはなぜ実施しないのか。また、5・6号について、建屋の上が白いが。

A. 建屋、平地、法面については散布を計画している。白い部分は主に樹木エリアのため、今回は実施しない。5・6号の件については確認。

Q. 徴収はいつ頃報告目途か。

A. 目途はできていないが、速やかに報告する。

Q. 中操の旁囲気線量は。

A. 確認する。

Q. 徴収内容を開示してほしい。

A. 保安院に報告し、その日にその内容を公開ということになるのではないかと思う。

以 上